

菅浦の湖岸集落景観



1 南西に開けた立地、夕日に赤く染まる菅浦。
2 琵琶湖から見る菅浦集落。北側には高い山が迫る。
3 東側の四足門、東西門現存で昔は南北門も存在したとされる。
4 中世から残る石垣。
5 ウマ。水洗い場とされていた。昔は琵琶湖に口をつけて飲めるほど水が美しかったという。
6 ハサ。稲は舟で運び直接干された。
7 須賀神社への長い参道。
8 参道。この先は土足禁止。
9 菅浦みかん。
10 今も残る漁法オイサデ漁。



「菅浦は湖北の中でも全く人の行かない秘境である。つい最近まで、外部の人とも付き合わない極端に排他的な部落でもあったという。それには理由があった。菅浦の住人は、淳仁天皇に仕えた人々の子孫と信じており、その誇りと警戒心が、他人を寄せ付けなかったのである」と、随筆家白洲正子は「かくれ里」（新潮社1971年）で、菅浦の印象をこう記しています。

奥琵琶湖の隠れ里ともいわれる「菅浦」は、大浦から長く続く湖岸道路の先に忽然と現れ、琵琶湖と山々が迫った立地に位置します。

「菅浦」に人が住み始めたのは、縄文時代に遡り、奈良時代には湖上交通の様が万葉集に詠われます。中世（鎌倉・江戸時代）の動向を伝える『菅浦文書』は、庶民によって書かれたとても珍しい記録で国の重要文化財にも指定されています。この文書から、14世紀の菅浦では住民の自治的・地縁的結合に基づく自治組織である「惣」が形成され、村人がルールをつくり裁判や独立した自治が行われていたことがわかっています。当時は集落自治で決定権を有していた「長老衆」と呼ばれる人々が、今でも存在しているなど、中世以来の自治意識やそれを支えた自治組織が緩やかに変容しながら継承されています。

集落の東西端にある「四足門」は15世紀頃にできたものと推定され、集落の境界や葬送儀礼の際は門を境にワラジを脱いで浄・不浄の境として機能してきたといえます。

祭も、スガの春祭りのために多くの人が帰省し、いまでも独特の伝統を色濃く受け継いでいます。

菅浦は漁業や稲作はもちろんのこと、世の中の情勢に合わせて林業や果樹栽培、タバコ、養蚕、鴨の養殖、鉾山開発、家庭内工場とさまざまな生業を営んできました。

秘境の地であるがゆえ、村の人々は世の中の情勢を機敏に把握し、限られた環境を巧みに利用し暮らしてきました。その生業や暮らしぶりが菅浦の景観を特徴づけ、国の「重要文化的景観」に選定されることになりました。



11 50年に一度の式年祭の稚児行列。
12 スガの祭りの一つ、幣祭り。五穀豊穡・集落安全を祈り幣走を3回まわす。
13 デヤツシヤイマショーの合図で一斉に舁子たちが飛び出して神輿を担ぐ。
14 神輿巡行。ムラマワリといわれ、集落を一周する。
15 漁の仕込。昔はハマと呼ばれる開けた場所で作業をした。
16 昔は各戸自家用の舟を所有し、塩津や尾上など湖岸の集落を行き来した。
17 今も稼働するヤンマー家庭内工場。

